

Title	状況要因が自己査定動機と自己高揚動機の顕現化に及ぼす影響
Author(s)	西村, 太志; 浦, 光博
Citation	対人社会心理学研究. 2 P.45-P.49
Issue Date	2002
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/5500">https://doi.org/10.18910/5500</a>
DOI	10.18910/5500
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 状況要因が自己査定動機と自己高揚動機の顕現化に及ぼす影響

西村 太志(広島大学大学院生物圏科学研究科・日本学術振興会特別研究員)

浦 光博(広島大学総合科学部)

本研究では、自己査定動機と自己高揚動機の顕現化に、状況要因がどのような影響を及ぼしているのかを検討した。自己関連出来事が起こった時に獲得する情報の安定性や予測可能性の観点から、出来事の特質として課題関連出来事と社会情緒的出来事を取り上げ、それぞれの出来事が生じたときに自己評価動機の顕現化の程度が異なるかどうかを検討した。総計 226 名の学生(大学生、大学院生と看護学校生)が二つの出来事のいずれか一方を想定する質問紙に回答した。その結果、自己査定動機は社会情緒的出来事が起こった時よりも課題関連出来事が起こった時の方が顕現化しやすいということが明らかになった。課題関連出来事時には、自己を正確に知ることが環境に対する適切な対処につながると言える。この結果は、先行研究の知見から導き出された本研究の仮説と概ね一致するものであった。自己関連情報の収集過程や、mindset 研究の観点からの議論がなされた。

キーワード: 自己評価過程、自己査定動機、自己高揚動機、課題関連出来事、社会情緒的出来事

## 問題

われわれは日常生活の中で数多くの出来事を経験し、その経験から自己評価が形成されていく。この自己評価の形成は、外的環境への働きかけが起こった上で成立するものであると考えられる。Taylor, Neter, and Wayment (1995) は、“自己評価は目的なき過程ではなく、何らかの動機づけに基づいた過程である”と指摘している。自己評価は、空腹や睡眠などのような生理的動因とは異なり、他者の存在や社会的な環境が誘因となり、他者との相互作用を通して充足される社会的動機である。したがって、喚起された動機を充足させるために自己関連情報の収集を行ったり(e.g., Trope, 1982)、社会的比較を行ったりする(e.g., Helgeson, & Mickelson, 1995)。その結果、自己概念の修正や肯定化という自己評価過程が成立すると言える。本研究は、自己評価動機として自己に関する正確な情報を得ようとする自己査定動機と、自己概念を維持・防衛しようとする自己高揚動機を取り上げ、自己評価過程における自己評価動機の顕現化の様相について検討する。これら二つの動機は、異なる要素を持つ自己評価動機であることが従来の研究で示されている(e.g., 沼崎, 1991)。

では、自己評価過程を喚起する誘因にはどのようなものがあるのだろうか。本研究ではこの点について、自己関連出来事の差異に焦点を当てて検討する。特に、自己関連出来事の領域を、課題関連領域と社会情緒的領域に分類して検討する。なぜなら、これら二つの領域で自己関連出来事が生じたときは、自己が注意を向け、獲得しようとする情報の予測可能性が異なっていると考えられるから

である。

Dunning (1995) は、自己の特性が変化させようとしても困難なものであると教示されたときには自己高揚的に、変化可能なものと教示された時には自己査定的に情報を求めることを示している。また、Sedikides and Strube(1997) は社会的比較の対象となる他者が抽象的な場合は自己高揚を、具体的な場合は自己査定が優勢となるであろうと示唆している。

これらの知見から考えると、自己が注意を向ける対象となるものが予測やそれに基づく修正が可能か否かが自己査定と自己高揚の出現を調整する重要な役割を演じていると言える。つまり、予測可能性の高い出来事の後は自己査定動機が顕現化し、予測可能性が低い出来事の後は自己高揚動機が顕現化すると考えることができる。

この予測可能性は、課題関連出来事と社会情緒的出来事の間では異なっていると考えることができる。Zajonc (1980) は、物理的刺激により生じる反応は、社会的刺激により生じる反応より予測可能性が高いと主張している。ここで言う物理的刺激とは、テストの点数や基準が明確な評価などのことであり、社会的刺激とは、他者からの曖昧な評価などに対応づけられる。前者は課題関連出来事において多く発生すると見なすことができ、後者は社会情緒的出来事において多く発生すると見なすことができる。また、Wayment and Taylor (1995)は大学生を対象とした研究の結果から、学業に関連する領域と社会的な領域に関する自己評価を求められたときの情報の利用可能性の量的な差異や質的な差異の存在を示唆している。学業に関す

る情報は利用可能性が高く、容易に客観的な情報に接触することが可能である。一方社会的なものに関する情報は漠然としており、そこでの客観的な情報は自己を明確に理解するのに必ずしも有用ではないと言えよう。よって課題関連領域では社会情緒的領域と比べ自己査定動機が優勢となり、社会情緒的領域では課題関連領域と比べ自己高揚動機が優勢となると予測できる。

また、この自己査定・自己高揚動機の生起には、成功失敗という出来事の成果の要因が影響を及ぼしていることも指摘されている。それは、気分一致効果に関する知見においてである。気分一致効果に関する研究では、状況に対する成功や失敗が気分を誘導する操作として用いられる。一般に成功状況ではポジティブな感情状態になり、失敗状況ではネガティブな感情状態となる。Sedikides and Strube (1997)は、ネガティブな感情状態にある時の方が、ポジティブな感情状態にある時と比べ自己属性をより客観的に認知すると予測している。また Sedikides (1992)は、ネガティブな感情状態ではネガティブな自己認知を、ポジティブな感情状態ではポジティブな自己認知を行うことを明らかにしている。したがって、失敗状況では自己査定動機が、成功状況では自己高揚動機が顕現化しやすいと予測できる。

以上の知見や予測に基づいて、本研究では以下の2つの仮説を検証することを目的とする。

仮説1: 課題関連出来事が起こった時は社会情緒的出来事が起こった時と比べ自己査定動機が相対的に高くなり、社会情緒的出来事が起こった時は課題関連出来事が起こった時と比べ自己高揚動機が相対的に高くなるだろう。

仮説2: ネガティブな出来事が起こった後のほうが、ポジティブな出来事が起こった後に比べて、自己査定動機は相対的に高いだろう。自己高揚動機はポジティブな出来事が起こった後のほうが相対的に高いだろう。

## 方法

### 調査対象者

大学生、及び大学院生137名(男性66名、女性70名、不明1名、年齢層20~27歳、平均年齢22.4歳)と、看護学校生89名(男性1名、女性88名、年齢層18~26歳、平均年齢20.0歳)である。したがって、全調査対象者は、226名(男性67名、女性158名、不明1名、年齢層18~27歳、平均年齢21.45歳)であった。なお、大学生及び大学院生は、後述の質問紙における場面想定を容易にするため指導教官が決まっている人を対象とした。大学生・大学院生に対しては個別に調査への協力を依頼し、看護学校生に対しては集合一斉調査で実施した。

### 調査デザイン

調査デザインは、2(出来事の成果: ポジティブ・ネガティブ) × 2(出来事の領域: 課題遂行・社会情緒的) × 2(動機: 自己査定動機・自己高揚動機)の3要因混合デザインである。成果と領域は被験者間要因、動機は被験者内要因である。

### 質問紙構成

場面想定法で実施した。質問紙は2つの部分から構成されている。

1) 場面想定のための教示: 教示文は6種類作成し、いずれか一つを割り当てた。課題関連出来事に関しては、調査対象者の日常的に体験する出来事が大学生・大学院生と看護学校生ではそれぞれ異なっているため、前者に対しては論文の作成場面を、後者に対して看護実習への参加場面とし、両場面に対して成功・失敗の2条件(4種類)作成した。社会情緒的出来事は、両者共にコンパでボーイフレンド・ガールフレンドを見つける場面を成功状況・失敗状況の2条件作成した。なお、具体的な教示文は、西村・浦・長谷川(2000)に示してある。

2) 当該場面で喚起された自己査定動機・自己高揚動機の測定: 想定場面で自己査定動機と自己高揚動機がそれぞれどの程度喚起されるかを各3項目ずつ、計6項目の尺度で6件法で測定した。具体的には「イメージした状況で、あなたは自分自身についてどのような気持ちを持ちますか。」と教示し、回答させた。自己査定と自己高揚の尺度は、自己査定を測定する項目を3項目、自己高揚を測定する項目を3項目、計6項目を先行研究(e.g., Taylor *et al.*, 1995)の定義を参考にして、独自に作成した。自己査定項目は「自分の能力をできるだけ正確に知りたい」、「自分の能力を明確にする情報が欲しい」、「自分が他者と比べてどの程度優れているのか、または劣っているのか知りたい」の3項目を、自己高揚項目は「自分自身の良い面だけに目を向けておきたい」、「自分自身の悪い面には目を向けたくない」、「以前の自分より成長したと思いたい」の3項目を作成した。それぞれの項目に対して、「全くあてはまらない(1)」から「非常にあてはまる(6)」の6件法で測定した。

## 結果<sup>1</sup>

まず最初に、質問紙の想定場面の親近性が全くなかったと回答した調査対象者のデータは削除した。結果的に、201名(男子大学生・大学院生55名、女子大学生・大学院生63名、女子看護学校生83名)が分析対象者となった。さらに従属変数の構造確認のため、自己査定動機と自己高揚動機の間に関数共分散を想定して確認的因子分析を行った。その結果、「以前の自分より成長したと思いたい(高揚動機)」を削除した場合、高い適合性を示した(GFI = 0.98, AGFI = 0.94)。よって、自己査定動機3項目、自己高揚動

機2項目の構造と定め、因子ごとに因子を構成する項目の合計得点を項目数で割ったものを動機得点として用いた。得点が高いほど動機づけが高いことを意味している。自己査定動機と自己高揚動機との相関は  $r = -.08(n.s)$  であり、自己査定動機の平均点は  $3.91(SD = 1.23)$ 、自己高揚動機の平均点は  $3.08(SD = 1.17)$  であった。

次に、本研究で想定した各要因の効果を確認するために、出来事の特質(課題関連・社会情緒的) × 出来事の結果(成功・失敗) × 自己評価動機(自己査定—自己高揚)の3要因分散分析を行った。その結果、動機の有意な主効果( $F(1,186) = 45.64, p < .001$ )、領域 × 動機の有意な交互作用( $F(1,186) = 6.86, p < .01$ )が認められた。Figure 1は、2要因の交互作用傾向が認められた、出来事の特質 × 自己評価動機について、出来事の特質ごとに自己査定動機と自己高揚動機の値を示したものである。

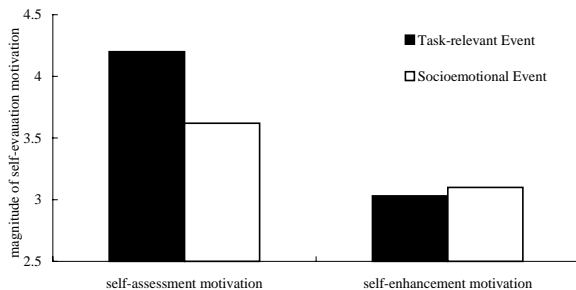


Figure 1. Magnitude of motivations as a function of self-relevant event and the kind of motivations.

仮説1の検討のために各動機ごとに下位検定を行ったところ、自己査定動機は、課題関連出来事時( $M = 4.21, SD = 1.02$ )の方が社会情緒的出来事時( $M = 3.62, SD = 1.16$ )より大きかった( $F(1,372) = 11.61, p < .001$ )。一方自己高揚動機に関しては、課題関連出来事時( $M = 3.03, SD = 1.08$ )と社会情緒的出来事時( $M = 3.11, SD = 1.05$ )の間に有意な差は認められなかった( $F(1,372) = 0.20, n.s$ )。これは、課題関連領域では社会情緒的領域と比べ自己査定動機が顕現化しているが、自己高揚動機に関しては領域間で差異は見られないことを示している。この結果は、仮説1の自己査定動機に関する結果のみを支持する方向であると言える。

仮説2は支持されなかった。出来事の結果 × 自己評価動機の交互作用は有意ではなかった( $F(1,186) = 0.55, n.s$ )ことから、自己評価動機の程度は、成功状況でも失敗状況でも違いが認められないと言える。

## 考察

本研究では、自己査定動機と自己高揚動機の顕現化に状況要因がどのような影響を及ぼしているのかを検討した。状況要因は、自己関連出来事として課題関連出来事と社

会情緒的出来事を取り上げ、それぞれの状況で自己評価動機の顕現化の程度が異なるかどうかを検討した。またそれぞれの出来事における成功と失敗の違いが自己評価動機の顕現化に及ぼす影響も検討した。ここでは、課題関連出来事と社会情緒的出来事においては、自己獲得する情報の予測可能性が異なり、そのため自己査定動機や自己高揚動機の顕現化の程度が異なるという観点からの考察を主に行う。

仮説1に関しては、自己査定動機に関する予測のみを支持する結果が得られた。予測可能性が高く具体的な情報が多い状況に直面したときには、そうでない状況に直面したときと比べて、自己査定動機が顕著になると言える。課題関連出来事は社会情緒的出来事と比べて、物理的刺激が相対的に多い状況であり、予測可能性が高く具体的な情報が多い状況であると考えられる。そのような状況では、自己についてより正確な把握を行うことが状況への適応や、その後の適切な判断や行動につながるとみなすことができる。従って、課題関連出来事を経験したときには社会情緒的な出来事を経験したときと比べて、自分自身を正確に知りたいとする自己査定動機がより高まると言える。

この結果は、目標達成への心理的構えの様相を検討する mindset 研究の観点から見ても妥当なものであると言える。Sedikides and Strube (1997) は、Taylor and Gollwitzer (1995) の mindset に関する研究の知見と Shepperd, Quelling, and Fernandez (1996) の知見を元に、mindset の差異が自己査定動機と自己高揚動機の顕現化を調整することを示唆している。Taylor and Gollwitzer (1995) の研究を具体的に述べると、自己の目標設定に従事するような熟慮状態では、非妥当性への恐れ(Kruglanski, 1990)が生じ、思考が現実的なものとなり、自己査定動機の方が顕著となる。一方決定した方法を実行する状態では、行動の遂行に関する不正確な見積もりが起りやすく、その結果ポジティブ幻想が生じ、自己高揚動機の方が優勢となるというものである。また、Shepperd et al. (1996)は、学生の自分自身のテスト成績についての認識が学期の初めは自己高揚的だが、テストが近づくにつれて自己査定的になることを示している。さらに、その研究では、4年制大学の4年生は、2年生や3年生と比べて、将来の就職時の給料や待遇について、悲観的な態度を示しやすいことも示されている。また、Gollwitzer and Bayer(1999)も、熟慮 mindset 状態は自己査定が、実行 mindset 状態は自己高揚が活性化されることを示唆している。

課題関連出来事と社会情緒的出来事が、mindset とどのように関連するかを考えると、次のように対応づけることが可能である。自己が明確な目標設定を行い、それに重点を置くことが、課題関連出来事時には社会情緒的出来

事時と比べて多いと考えられる。社会情緒的出来事に関しても目標設定が行われる事はあるが、そこでの目標は、他者との情緒的つながりを求めるといった、関係性の構築自体が目標である事が多いと考えられる(e.g., Clark & Mills, 1979)。社会情緒的領域における目標は、課題関連領域における目標と比べ、何らかの数値目標のような具体性に欠け曖昧である。したがって、課題関連出来事時には熟慮状態が社会情緒的出来事時と比べより多く起こりやすいと考えられる。そのため、本研究で得られた結果のように、課題関連出来事時には社会情緒的出来事時と比べて、自己査定動機が顕現化しやすいと言える。

以上のことから、予測可能性が高く、また熟慮を必要とするような状況に直面したとき、自己を正確に知ろうとする動機づけが高まることが明らかとなった。課題関連出来事時には、自己を正確に知ることによって、安定的な自己評価を獲得することが促進されると考えられる。

なお、自己高揚動機が課題関連出来事時と比べ社会情緒的出来事時で顕現化するという仮説は支持されなかった。このことに関しては、Sedikides(1993)の示唆から次のように考えることができる。Sedikides (1993)は自己査定・自己高揚・自己確証の3種類の動機が自己評価過程に及ぼす影響を6回の調査を通して検討している。それぞれの調査の概要は以下の通りである。まず、いくつかの教示を行い、その際に複数の特性を自分自身が持っているかどうかを被験者に判断させた。そして、それらの特性が自己を記述するのに中心的な特性か周辺的な特性かによって、また肯定的か否定的かということによって、いずれの動機が顕現化しているのかを調べた。その結果、6回の調査のほとんどにおいて、自己高揚を最も強く説明する結果が示された。このことから Sedikides (1993)は、自己高揚動機が自己評価過程にとって最も影響力が強い動機であると結論づけた。すなわち、自己高揚動機は、様々な状況において一貫して生じる根元的な動機であると考えられるのである。このようなことから、自己高揚動機はある特定の状況で非常に顕著に顕現化するのではなく、その強さの程度は状況が異なってもあまり変わらないと考えられる。

仮説2に関しては、支持する結果が得られなかった。失敗を経験した場合でも成功を経験した場合でも、自己査定動機と自己高揚動機の顕現化の程度に差はないことが結果で示された。これは、自己評価動機の顕現化には、成功—失敗という出来事の成果よりも、課題関連—社会情緒的という出来事の特徴が大きく影響しているということを示唆するものである。自己を正確に捉えようとするといったことは、自分が失敗を経験したというよりも、直面する状況において自分がどの程度予測可能な情報を獲得できるかどうか依存するのかもしれない。これらの点については、

今後さらなる検討が必要である。

本研究の結果から、自己査定動機や自己高揚動機の顕現化に関して、出来事の特徴の差異が大きく影響していることが明らかとなった。課題関連領域の出来事を経験すると、社会情緒的出来事を経験したときと比べて、自分自身を正確に知ろうとする動機が高まる。この結果は、課題関連出来事時のような明確な情報や目標があるような状況においては、自己は能動的に自己関連情報の収集を行うことで直面する状況に適切な対処を行おうとしていることを示唆するものである。

## 引用文献

- Clark, M. S. & Mills, J. 1979 Interpersonal attraction in exchange and communal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 12-24.
- Dunning, D. 1995 Trait importance and modifiability as factors influencing self-assessment and self-enhancement motives. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 21, 1297-1306.
- Gollwitzer, P. M., & Bayer, U. 1999 Deliberative versus implemental mindsets in the control of action. In S. Chaiken & Y. Trope. (Eds.), *Dual-Process theories in social psychology* (pp.403-422). NewYork: Guilford Press.
- Helgeson, V. S. & Mickelson, K. D. 1995 Motives for social comparison. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 21, 1200-1209.
- Kruglanski, A. W. 1990 Motivations for judging and knowing: Implications for causal attribution. In E.T. Higgins & R. M. Sorrentino(Eds.), *Handbook of motivation and cognition. Foundations of social behavior*:Vol.2. (pp. 333-368). New York: Guilford Press.
- 西村太志・浦 光博・長谷川孝治 2000 出来事の特徴の差異が自己評価過程における他者選択に及ぼす影響: 自己査定動機と自己高揚動機の観点から 社会心理学研究, 16, 39-49
- 沼崎 誠 1991 自己能力診断が可能な課題の選好を規定する要因 自己査定動機・自己高揚動機の個人差と性差 心理学研究, 62, 16-23.
- Sedikides, C. 1992 Changes in the valence of the self as a function of mood. *Review of Personality and Social Psychology*, 11, 272-311.
- Sedikides, C. 1993 Assessment, enhancement, and verification determinants of the self-evaluation process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 317-338.
- Sedikides, C. & Strube, M. J. 1997 Self-evaluation: To thine own be good, to thine own self be sure, to thine own self be true, and to thine own self be better. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 29, (pp. 209-270). California: Academic Press.
- Shepperd, J. A., Quelling, J. A., & Fernandez, J. K. 1996 Abandoning unrealistic optimism: Performance estimates and the temporal proximity of self-relevant feedback. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 844-855.

- Taylor, S. E., & Gollwitzer, P. M. 1995 Effects of mindset on positive illusion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 213-226.
- Taylor, S. E., Neter, E., & Wayment, H. A. 1995 Self-evaluation processes. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **21**, 1278-1287.
- Trope, Y. 1982 Self-assessment and task performance. *Journal of Experimental Social Psychology*, **18**, 201-215.
- Wayment, H. A. & Taylor, S. E. 1995 Self-evaluation process: Motives, information use, and self-esteem. *Journal of Personality*, **63**, 729-757.
- Zajonc 1980 Compresence. In Paulus (Ed.), *Psychology of group influence*. (pp. 35-60). Hillsdale, NJ.

## 註

- 1) 本調査は、大学生・大学院生を対象とする場合と、看護学生を対象とする場合では、質問紙の教示文が若干異なっているので、そのことが結果に影響するかどうかを検証するために、全ての分散分析において調査対象者の属性をダミー変数とし、共変量として投入した分析を行った。その結果、質問紙の教示文の違いは、結果に影響を及ぼしていないことが確認された。したがって調査対象者は分けずに分析を行った。

## The influence of situational factor on self-assessment motivation and self-enhancement motivation

Takashi NISHIMURA (*Graduate School of Biosphere Sciences, Hiroshima University, and Research Fellow of the Japan Society for Promotion of Sciences*)

Mitsuhiro URA (*Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University*)

This study investigated the influence of situational factors on self-assessment motivation and self-enhancement motivation in the self-evaluation process. In particular, it was hypothesized that task-relevant events would motivate one's self-assessment more than self-enhancement. On the other hand, socio-emotional events would motivate one's self-enhancement more than self-assessment. Two hundred and twenty six students (undergraduates, graduate students, and nursing school students) completed a questionnaire, including a hypothetical situation on either task-relevant or socio-emotional events. The results were generally consistent with the hypothesis. The results were interpreted from the perspectives of mindset study and of self-relevant information seeking in self-evaluation process.

Keywords: self-evaluation process, self-assessment motivation, self-enhancement motivation, task-relevant events, socio-emotional events